支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

# 「一杯の氷水」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

なぜあのとき、一杯の氷水を買うお金があったのか、いまだに分からない。

「氷水」、これはコオリスイと読む。今でいう「かき氷」だが、当時田舎ではそう呼んでいた。わが家は、小さい子どもが現金を持つような家庭環境にない上に、氷水となれば、夏に食べられる憧れの逸品だった。食べられるのは7月下旬、梅雨明けの暑～い日にある、相馬野馬追祭りの武者行列を見に、町へ連れていってもらったときぐらいであった。

何らかの理由で手にしたお金を持って、二つ違いの兄と近くの雑貨屋に向かった。

氷水一杯分のわずかなお金であるため、氷水をつくる器械をチラチラ見ながら、二人でしばらく迷ったことを記憶している。

そして、やはり憧れには勝てず、意を決して二人で一杯の氷水を注文した。

二人で大事に、そして必死に食った。家族に秘密で、かつ子どもだけで店に食べにくる不思議な不安感を背に。

後に、氷水をつくってくれた店のおばちゃんの声が、人づてに祖母の耳に入った。

「見つかったか」と息をのんだ。

が、意外とおばちゃんの言葉は、『ひとり分のお金しかないときはないなりに、ひとつを頼んで仲良く兄弟二人で分け合っていて、えらかった』というものであった。

今もかき氷を見るとき、ときどき思い出す。あのときにとっては冒険に近い、セピア色の風景である。セピア色の中に、あの白い雲のような模様が入ったスタンドの氷水の容器と、「はんぶんこだぞ」と私が食っている間の厳しい兄の顔が残っている。

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める